

## 会 議 録

|                    |  |   |           |
|--------------------|--|---|-----------|
| 会議の名称              | 平成22年度 第2回豊中市図書館協議会  |   |           |
| 開催日時               | 平成22年(2010年)11月29日(月)14時30分~16時  |   |           |
| 開催場所               | 豊中市立岡町図書館 集会室  | 公開の可否   | ㊦・不可・一部不可 |
| 事務局                | 生涯学習推進室 岡町図書館  | 傍聴者数  | 3人        |
| 公開しなかった理由          |  |   |           |
| 出席者                | 委員   | 船曳弘栄 上口佐知子 鵜川まき 中川幾郎<br>塩見昇 村上泰子 宮崎宏之   |           |
|                    | 事務局  | 生涯学習推進室長 義務教育課主幹 岡町図書館長 千里図書館長 野畑図書館長<br>庄内図書館長 岡町図書館副館長2名 岡町図書館副主幹3名 岡町図書館主査 |           |
|                    | その他  |   |           |
| 議題                 | <ol style="list-style-type: none"> <li>1 平成21年度豊中市の図書館活動の改訂及び平成21年度豊中市立図書館評価システムについて</li> <li>2 豊中市子ども読書活動推進計画について</li> <li>3 豊中市立図書館の課題解決支援機能について<br/>DVD「学びを支え心をはぐくむしまねの学校図書館」の上映(抜粋)<br/>ブックプラネット事業について</li> <li>4 その他</li> </ol> |   |           |
| 審議等の概要<br>(主な発言要旨) | 別紙のとおり   |   |           |

## 平成22年度（2010年度）図書館協議会

日時：平成22年（2010年）11月29日（月）14時半～16時

場所：豊中市立岡町図書館 3階集会室

出席者：（敬称略）

委員 船曳 上口 鶴川 中川（委員長） 塩見 村上 宮崎

事務局 山羽 山本 古川 林 大原 北風 江口 内田 小山 須藤 松井 西口

### 開会

資料確認

委員（欠席者）の紹介

### ●委員長

最初は報告事項である。議題1、平成21年度豊中市の図書館活動の改訂及び平成21年度豊中市立図書館評価システムについての説明をどうぞ。

### ●事務局

お手元の薄いオレンジ色の表紙の「豊中市の図書館活動」は、大慌てで作った前回原稿をかなり手直しして改訂したものである。

当初決算検討の場である議会に間に合うようにと、数値に気をつけて作成したものであり、誤字脱字等後日気づいた点から訂正し、例えばヤングアダルトサービスのページなど、文章の見直しをした箇所もあったが、10月末に「図書館の未来を考える会」の方との話合いで、多くのご指摘を受けた後、見出し・活字の大きさ・細かく見にくいグラフや地図などを訂正した。文章の内容表現についても、ご意見をいただき、行政サービスの連携項目など表現を変えた箇所もある。

そのように全体を見直して作成したものが、今回の薄いオレンジ色のものである。その他にもご指摘いただいた項目、市民との協働・職員研修・障害者サービス・多文化サービスなどの項目については内容を検討し、職員間で議論を深めたうえで、来年以降の取組みに活かしてまいりたい。「豊中市の図書館活動」改訂版の報告は以上である。

続いて、図書館評価システムについては、今日当日資料となっている平成21年度豊中市立図書館評価システム自己点検報告書とA3の豊中市立図書館システム評価表のリーディング項目である。この2点、前回協議会の時お渡したものは評価「案」であったが、それを基にその後各館ごとに意見を集約し、月末の全体会議を利用して職員全体で議論の場を設けた。そこではこの評価表を材料としながらも、それに留まらず広く課題を出し合い、解決に向けた共有の機会となった。それらに出された意見を基に、リーディング評価項目については右の文章表記のところと図書館の現状と今後の取組みのところを6カ所ほど修正・追加をした。

一例として、子ども読書活動の推進については、大人への啓発活動や啓発事業について、子育てサロンで絵本講座を実施したことなども追加しながら、文章表現をより分かりやすくする為に何点が修正を行った。こちらは平成21年度版として確定し、公開していきたいと考えているので、本日お配りした

2点の表について、何かお気づきの点があれば事務局までご連絡いただきたい。

●委員長

ただ今「豊中市の図書館活動」の本編及び統計・資料編それから「豊中市立図書館評価システム自己点検報告書」の冊子と「リーディング項目」の一覧について説明を受けたが、事前配布分も含めてご意見があればいただきたい。

●委員

統計資料編の11ページ、リクエストサービスについて受付件数と提供件数が図書館ごとに出ている。21年度の受付件数を見て疑問を持った。というのは、件数が減ってしまっている点である。よく見たら、アカウントの方法を変えたという事が下に書いてある。それで納得はしたが、こういう統計数字については、継続性という事が大事なので、例えば20年度と21年度を見て、比較したいときに、実際がどうだったのかがわかりにくいのは困る。減っているのか、増えているのかよくわからない。それから受付件数のところで、提供件数が出てくる。20年度までは、受付件数と提供件数を比較して見ると、もちろん提供件数が下回るということはわかる。受付件数の内数として提供件数が出てくるのではないと、よくわからないのではないかと思った。アカウントの方法はしかるべき理由があって変えられたと思うが、非常にわかりにくかった。

●事務局

カウントは館内とWEBとOPAとをまとめた形の表記になっているので、総数については下段の合計数のところを見ていただきたい。確かにカウント等の表し方について、わかりにくい表現があるかと思う。今後少し工夫したい。

●委員長

これについては報告事項という事なので、お気づきの点はまたご意見いただきたい。

議題の2は豊中市子ども読書活動推進計画についてである。これについてもお手元に資料が配られているのでそれをご覧いただきながら聞いていただきたい。

●事務局

お手元にあるパワーポイントを印字した資料に沿ってお話をさせていただいた後、評価の報告書もご覧いただきながら続けてさせていただきたい。

このパワーポイントのデータは、9月17日日本図書館協会の奈良大会で豊中の取組みとして発表したものである。2000年の子ども読書年以後、この10年の動きを公共図書館の立場・学校図書館の立場・市民の立場の三者から報告するという趣旨で、私は公共図書館の立場からこの10年を振り返り話をさせていただいた。豊中市の子ども読書活動について、評価に至るまでの経緯を話させていただくが、30分を想定して作った内容を半分に凝縮するため、少し早めに進めたい。

豊中市の子ども読書活動の第1期は、1960年代子ども文庫が地域の会館や自宅に本を備えて、本を貸出したり読み聞かせたりという活動を開始された時期と重なる。

第2期については、図書館と子ども文庫の活動がさらに大きく広がっていった時代になる。豊中市の全ての子どもに読書の喜びをもたらすにはどうしたらいいのか、模索しながら広がっていった時期が第2期にあたる。

第3期が2000年の子ども読書年から2010年の今年に至るまでの、子ども読書活動全般にかかる国を含めた大きな動きの中で取組みを進めた時期となっている。評価について話をする前に、この1期から3期までを振り返った上で、評価の報告書についてご報告をさせていただきたいと思う。

第1期は子ども読書活動推進の始まりの時期という事で、60年代から子ども文庫活動が始まり、図書館においても1959年に子ども室が開室した。一方で子ども文庫と図書館とが連携する事業が始まり、豊中子ども文庫連絡会という文庫の横のつながりが出来たのが1971年であった。そのあたりから豊中子ども文庫連絡会と図書館は、いろいろな事業を協働して行うようになった。1980年には、市としても地域で子どもに本を手渡す担い手としての子ども文庫を育成団体として認め、補助金という形で支援を行う形になった。子どもたちに読み聞かせをしたり、手作り遊びをしたりする「子どもと本のまつり」が、来年でちょうど30年目にあたる。これほど長く市と市民が協働している事業は、他にはあまりないのではないかな。

それから80年代に入り、この頃は私自身もちょうど図書館に勤めはじめた頃だが、子どもの数が全体的に減ってきたこと、同時にライフスタイルが変わってきたせいもあり子どもが忙しくなって、図書館や子ども文庫にやってくる子どもたちも減ってきた時代であった。そこで図書館も子どもたちのいる幼稚園や保育園や学校へ出かけて行く活動を始め、子ども文庫においても、文庫に来ない子ども達がどこにいるのか、子どもたちが一日の中で一番長い時間を過ごすところは学校であるという事から、学校への調査を始めた。その頃の学校の図書館は、まだまだ学校図書館と言えるものではなかった。鍵がかかって、人がいない状態だった。やはり学校には子どもたちに本を手渡す担い手が必要であるということで、学校司書の必要性を市民の方々が説かれて、粘り強い活動をされた結果、市もそれを真摯に受け止め、1993年から学校司書の配置を始め、2005年に全校配置となった。

図書館でも、当時の館長が「子ども文庫の世話人や図書館の職員だけの力では、逆立ちしたところで、豊中の子どもたち全員に本を届けることはできない」と考え、文庫の世話人を講師に招き、その頃はボランティア養成講座と言っていたが、今では名称を「子どもと本をつなぐボランティア講座」に変更したが、市内の各地で子どもに本を手渡す人達を増やしていく方向に軸足を向けて取組んだ。

第1期で子ども文庫の方が撒いた種が、第2期は大きく育った時期だと考えている。

この第1期と第2期の時期をふまえ、第3期となる。

2000年が子ども読書年だったが、その翌年に国が法律を作り、国も府も様々な取組みをするわけだが、豊中では第1期と第2期の取組みが既に存在していた。そこで計画を作るにあたっては今までをふまえた内容で作らなければならないということから、計画作りをするにあたって、市民の活動と共に図書館関係部局との繋がりを基礎として、計画策定に取組んだ。

そこで計画を立てるわけだが、一番大切な理念は、豊中の全ての子ども達が読書を楽しむ為の環境整備をするという事で、子ども文庫や図書館などで全ての子どもが読書を楽しみ、育成という面では図書館の調べる・学ぶ機能を使いこなして、生涯に亘って図書館を利用していけるそんな市民を育てるというのが目的の一つだった。

もともと市民の活動が土台にあった取組みだったので、「読書」という個人的な営みに、国が言ったか

らといって強制するような考え方はなじまないのではないかという意見もあったが、一方で振り返ってみれば、障害のある子どもや外国人の子どもも含めて、あるいは図書館から遠いところに住んでいる方も含めて、全ての子どもたちが読書を楽しむ環境にあるかという点はまだまだだったので、市民と行政関係機関が連携しながら環境整備を行っていき、推進計画を2005年に策定した。

多くの自治体では計画を作った段階で終わっているが、2006年に実施計画を作った。乳幼児・小中学生・障害のある子どもや外国人の子どもの3つのグループにわかれて、それぞれの担当が何をしていくべきかと考えて、実施計画を作った。

実施計画を作るだけでなく、情報共有をしながら取組みを進めるためのプラットフォームが必要であるという事で、子どもや読書に関わる市民や行政や事業者から構成する推進連絡協議会と、小中学生・乳幼児・障害のある子どもや外国人の子どもという3つのワーキンググループを中心に事業を進め、年度ごとに振り返りを行い事業実施報告書を作成し、昨年度ちょうど5カ年の計画期間を終えたため、現在評価の報告書を作成したところで、今年度中に第2期実施計画についても策定予定となっている。子ども読書の評価については後で詳しく述べるが、数だけで表せるものではなく、検討を重ねた結果色々な表現方法をとって併記した上で、本日お渡しした資料の形となった。

先程「地域交流会」という取組みが出てきたが、これは市民と行政が子どもと読書をキーワードに繋がる機会としており、決して読み聞かせのスキルアップの機会ではない。その時に集まる人達がテーマを決めてグループワークを行い、色々な情報共有をしている。自由な交流の時間を設定し、最初の頃は学校図書館の司書や公共の図書館司書や読み聞かせボランティアを中心とした、読書に特化した方達が集まっていたが、最近では地域で子どもに関わる方、いわゆる民生・児童委員の中でも子ども専門の主任児童委員の方や地域支援保健師、あるいは書店主や保健士も参加した情報共有の場となっており、この機会は市民と行政が共に地域の課題を共有する貴重な機会となっている。

これは昨年度千里図書館で行った地域交流会の様子であるが、千里地域の保健師からその地域について情報提供していただいている場面である。北部では転勤が多くて、子育てに孤独感を持つケースや、自分の子育てに自信が持てない親が他地域と比べて多いという情報をいただくなど、貴重な情報共有の場となった。

こちらは紙ベースの物をスキャナーで取り込んだため、非常に見づらくて申し訳ないが、これは元々は2004年に大阪府子ども読書活動推進連絡協議会が行われた際に、そのファシリテーター講座を受け今ここにもおられる委員が豊中の状況をまとめられたものだが、その後、子ども読書の連絡協議会の会長がいろいろところで豊中の状況を報告する時、そのつど改訂されて使われたもので、年度ごとに変化が分かるものとして残っているので、見ていただきたいと思う。中心が図書館となっており、薄いブルーのところ为学校教育関係で、パープルのところ为孩子未来部関係で保育所や放課後子どもクラブとか子育て支援センターと健康支援室などという図になっている。この時点については、まだシンプルな図で、主として図書館と子ども文庫を中心とした子ども読書活動の取組みが見てとれると思う。これが実施計画策定の2年前の内容である。

2004年に実施計画を策定し2007年の計画2年目になると、先程と比べても明らかに複雑になり、今まであまり子どもの読書に関わりがなかった高校や公民館が加わり、地域の子育て支援センターや地域支援保育士との協働関係も生まれ、さらに複雑になっていった。社会福祉協議会が主催する子育てサロンへも、子どもの身体や心に関わる専門職である地域の保健士や保育士と同様、図書館司書が出

向き読み聞かせなどを行うようになった。また計画が進むにつれ、他部局においても子どもの読書について続けて事業に取り組んでいただけたところが増えてきた。国際交流協会からは、外国人の方には読み聞かせの習慣がない国もあり、図書館を利用する習慣がないところもあるので、よかったら交流協会に来て読み聞かせのアドバイスをしてほしいという依頼を受けた。そこでは、図書館の司書がゆっくり日本語でお話をさせていただいて読み聞かせをした後、外国人のお母さんに母語で読み聞かせをしていただいたり、あるいは図書館から持ちこんだ絵本を借りていただいたり、あるいは図書館についてどういうイメージを持っているかという聞き取り調査を行った。国際交流協会では「多文化子ども読書推進事業」と位置付けて、進めていただいている。

2010年になると、もうどう繋がっているのかを見るためではなく、豊中市でネットワークが網目のように張り巡らされているイメージ図として受けとめていただけたらと思う。一方通行ではなく、それぞれの関係がより複雑になり、関係が深まっているのを見てとれると思う。「とよなか国際交流協会」や「すってぷ」や「社会福祉協議会」など、市とも民間とも違う団体という事で、黄色にしている。

以上ざっと今までの10年について振り返ったが、この10年の変化については最初図書館を中心にした繋がりがだったものが、計画が始まって2年目に公共施設の連携が深まって行って、2010年になりますと更に私立幼稚園や民間保育園との連携や、サロンやサークルとの繋がりができた。2007年から計画が進むにつれて子ども読書のワーキンググループの中にも民間の保育園と私立幼稚園の代表が参加されていることから、連携も深まった。図書館は、今まではそういうところとあまり組織的な繋がりがなかったが、これをきっかけに顔の見える繋がりができ、それぞれの事業を情報交換する機会が増えたので、ネットワークについてもだいたい成果が出てきたことがおわかりいただけると思う。

ここまで、第2期実施計画に向けて、豊中における60年代からの長い間の取組みの蓄積、及び国や地方公共団体を交え、いわば国を挙げて子ども読書活動推進が始まった2000年以降の動きについて、ざっとお話させていただいたが、そのうえで、今日の配布資料である第1期実施計画の評価報告書を見ていただきながら、お話をさせていただきたい。

この評価の報告書は、子ども読書活動推進連絡協議会及びワーキンググループにおいて、17年度から21年度までの5年間の評価を行い、それを評価の報告書としてまとめ、現在公開の準備に入っているものである。先程お伝えしたように、子ども読書活動についての評価は数値だけでは表せない、あるいは現れるまでには相当な時間がかかる、あるいはずっと見えないものかもしれない、そういう認識を持ちながら、会議でいろいろなご意見をいただき、7ページから8ページのところに評価の指標一覧をのせたが、いくつかの指標を挙げて、それも挙げ方としては事業などのソフトウエアという指標、施設と資料に関するハードウエアという指標、さらには子どもに本を手渡す担い手という点でヒューマンウエアという指標、この3つを指標として、第1期の実施計画の評価を行うこととした。この指標の一覧を基に、9ページ以降にあるように全般的な成果と課題の文章をまとめたが、数値に出ない部分やアウトカムに近い内容のものについては、それぞれの成果のところで、「こんな成果がありました」等、生活の変化で見られた事を文章で表記している。「子育てサロンやサークルに行くようになって、いろいろな本を読むようになりました」とか、数字では出ないものを部分的に補うような形にしている。さらに昨年度は、学校や保健センターなどでアンケート調査や聞き取り調査を実施したが、追加して今年度は、学校司書や市立図書館司書の意識調査を行い、先程申し上げた取組みの実績と合わせ、9ページに全般的な子ども読書について、一般的な課題と成果について書いたものになっている。

第1期実施計画の実質4年間の主な成果としては、市民同士あるいは行政同士、または市民と行政が、それぞれ新しい繋がりを持って、事業に取り組んでいったことにある。これは子ども読書の基本理念である、成長・発達の段階に応じて読書に親しむ機会の提供をする、あるいは地域社会と連携するというところに繋がり、第1期の大きな成果と考えている。また、図書館や地域の様々な取組みの場で、本やお話を楽しむ機会が増加したとともに、子ども読書に関わる市民や職員の意識が変わってきた。例えばワーキンググループのメンバーである保育士の方に、この4年間はどうかと訊ねると、図書館と共に事業を行うなかで、読書に関する意識が高まり、絵本の選び方が変わってきたという意見をいただいた。

これらは子ども読書の活動をそれぞれが自身の事業とし、子育て支援や地域の課題解決に向けて取り組んだ成果と考えている。また一方で、第1期を終えた今でも課題が残っており、とくに施設に出かけてこない居宅の乳幼児と保護者への情報提供が大きな課題の一つとなっている。また昨年度実施したアンケートの結果からも、小学校高学年から中学生にかけて、年齢が上がるにつれ読書から離れていくという傾向が見受けられている。携帯やゲームなど様々な新しいメディアに囲まれる中で、時代に即した読書のあり方を探っていくというのも、第2期の課題の一つとなっている。

これから自主的な読書活動を大切にしながらも、本に触れる機会をより豊かに設けて、学校での読書活動や学校図書館を活かした学習活動を支援し、学校・学校図書館と連携した取組みが必要であると感じている。

また、障害のある子どもや外国人の子どもに対しても、多様な資料提供が必要とされている。さらに子どもに本を手渡す担い手としての、市立図書館司書及び学校図書館司書に意識調査を今年度実施したところ、この実施計画を意識しているけれども、なかなか実施出来ていないという回答が双方とも4割を超えた。これについても、子どもと本を繋ぐ現場での課題を今後探っていく必要があると受け止めている。これらの第1期実施計画における課題を解決するには、個々の取組みで完結するものではなく、子どもの発達段階に応じた取組みを継続して進めていく必要があり、これらの課題をふまえて第2期の実施計画を策定する予定である。

図書館協議会の委員の皆さまからも、第2期実施計画の策定に向け、また今後の取組みについてご意見をいただきたく、お願い申し上げます。なお第2期の実施計画については、平成23年2月の豊中市子ども読書活動推進連絡協議会で最終確認し、その時点で公開をしていく予定となっている。

## ●委員長

ただ今のご説明についてご意見ご質問等があれば、お受けしたい。

## ●委員

当初から関心を持って見ていたが、この評価報告書はソフトウェアとハードウェアとヒューマンウェアとの視点に分けられていて、しかもそれが何を意味するかもはっきりと説明されていて、すごくわかりやすく、しかも課題と成果が挙げられており、各項目について例えばこういう成果がありましたとプラスのところをきちんと挙げてあるというところも、すごくいい評価報告書だと思った。

この第1期の実施計画取組みの期間中に、マップで示されたように、図書館を中心に子どもの読書に関わる豊中市内の行政、市民と施設のつながりが拡がり深まるところがすごいと思う。本当に成果が上が

っていることを期待したいと思った。とにかくこの表や報告書を作成されるのは大変だったと思うが、個人的な感想が大変評価できると思う。

#### ●委員

私自身も豊子連の活動を通じて、最初の計画策定のところからずっと関わりを持ってきたので、すごく丁寧にまとめてくださっているなという印象を持っている。表面的に子どもが本をどれだけ読めばいいとかいうところではなく、環境整備に力を入れていこうという最初からの姿勢を大事に取り組まれてきたのだと思う。

ただ、私もいろいろな仕事とかで接する子どもたちを見ていて、実態として子どもたちにどう伝わっているのかを思い浮かべる時に、たとえば普通の絵本・本とドラゴンボールだの名探偵コナンなどのコミックが並んでる場合に、どちらに手を出すかという、どうしてもコナンとかドラゴンボールを取る子が多いという現実がある。やっぱりそちらに目がいく子が多い。確かにそれらは決して全面的に否定すべきものじゃないけれども、やはりまだ絵本や本は頭から嫌いだという子がたくさんいたりする。もちろんそういう子がいても当たり前で、100パーセントにならないのはわかっているが、そういう子らにも、中には自分にとって面白い本もあるんだと気がついてほしい。そのためにはどうしたらいいのかという問いが、自分の中にいつもある。豊中の取組みでは、そこを少しずつでもカバーしていこうとしてやってきているということ、豊子連として関わってきた側として認識しているし、これからもそれを少しずつ積み重ねていってほしい。1期から2期に確実に繋げてほしいと強く思う。

#### ●委員

学校でも読書活動を一生懸命やっているところだが、こうして市内全体での関わりを表す図などを見ると、すごいと思う。子どもたちに関わる全部のところ子どもたちの環境を整えようを目指す、そういう意識はありがたいと思う。これは一つの例だが、私の学校では保護者の方がボランティアで読み聞かせをしてくださっていて、私もそこに参加しているのだが、今日はこういう風に手伝ってくださいというような練習もある。そこでこういう風に読んでくださいと具体的な指導も受けるのだが、そういう保護者の方の意識が高まっていて、みんなで子ども達に伝えようとするような環境について、皆がつながっているのだと感じ、嬉しく思う。

#### ●委員

とてもご苦勞様でしたと言いたい。この取組みにおいて、図書館と読書というのはすぐ繋がるが、計画の当初から、豊中の子どもの暮らしのいろいろな方面の関わりを、全体的に捉えようというのが一つの特徴だったというのは先ほどの説明にもあったと思う。そして事実、そういう形で作業を進めてこられた。保育所や学校も読書だけやっているわけではないから、それぞれの現場において、受け止め方がそれぞれ異なって当然であり、同じレベルにはなりにくいと思うが、せっかく子どもの暮らしの総体の中で読書をとらえようという取組みと成果なので、若干の誤差はあるにしても、今後もそれぞれのところで互いが繋がっていけるようなものとして受け止められるように工夫されたらいいなと思う。第1期の貴重な成果だと思う。



## ●委員

関連質問ということで、一つ指摘したい。

この活動はたいしたものだと思ったが、実際に自分で9館の子どもの本のコーナーを訪ね、いろいろ関心を持って見ているが、一つ気になる図書館がある。庄内図書館の2階の子ども室である。

あそこは子どもがたくさん利用しているのか。よその図書館は、保育所の先生が子どもを2～30人引き連れて本を借りたりしていて、それこそ騒がしいくらいの賑わいがある。ところが庄内の2階は閑散としていて、たまたま行った時だけがそうなのかとも思ったが、どうも何回行っても同じ様子だ。本当にここで色んな取組みが行われているのかということも思った。疑問を呈するようで悪いが、それがちょっと気になる。実際に積極的に読書に関わる人へはいろいろな成果が上がっていくが、どうも非常に地域差があるのではないかと感じる。地域による格差を考えなければいけないのではないかと思う。私の誤認かもしれないが、図書館へ行って見てそういう印象を強く受けた。

## ●事務局

確かにご指摘の庄内図書館は、サービス域内の人口・子どもの数もかなり減ってしまっているのは事実である。ただし地域特性として、北部の図書館と比較するとよくわかるし、庄内図書館の子ども室に座っていると強く感じるが、親子で来るよりは兄弟で来るというパターンが非常に多い図書館だ。

そういう意味では子ども達の生活領域の中で、かつてほど公共図書館の存在感が強くなってきているのではないかという懸念の元に、地域の様々な活動や協働で地域活性化に取り組む動きがあるので、そういったところで、最終的には子ども達の居場所としてちゃんと定着することを目指して試行錯誤しているのが事実である。

## ●委員長

私個人としては、報告書を拝見して、すごく着実でしっかりした取組みをされてきたと思う。

「ヒューマンウエア」という言葉を日本で初めて使ったのは私だが、初めて使った時は猛反発やバッシングを受けたものだった。ところが今では一般用語になってきた。「社会的関係資本」が「ヒューマンウエア」だというのがその後証明されてきたということだ。「社会的関係資本」より使いやすいし、分かりやすいと思う。17年前に使った時には、相当たたかれたが、結果的に一般語になったという事で喜んでいる。

それでは次の議題に入りたい。

議題3、豊中市立図書館の課題解決支援機能のブックプラネット事業について事務局から説明を。

## ●事務局

まず、島根の学校図書館のDVDをご視聴いただきたい。

—DVD（抜粋）視聴—

続いて、前回簡単に説明をさせていただいたが、「ブックプラネット事業」について、義務教育担当課から前回出席できなくて申し訳なかったが、今年度の経過についてご報告したい。

今年度は、学校の現状やニーズをふまえて、概念設計に取り組むという事でスタートしており、コンサルティング会社の支援・協力を得ながら、現在現場調査に取り組んでいる。

先行調査として小学校や中学校を訪問し、その後今回資料として配布したアンケート調査を作り、学校の管理職あるいは学校図書館担当者や学校図書館専任職員および公共図書館の司書を対象に実施した。また、このアンケートと共に、学校図書館を主に利用している子どもたちの声も大切だということから、現在子どもたちへの調査を全校で行っている。

今のところ、ようやく管理職等の大人のアンケート集約ができたところで、まだ分析まで至っていない。本日はそこから見えてきた事を速報のような形で簡単にご紹介させていただきたい。

アンケートの対象となる方々の代表に入っていたいただいたワーキンググループを立ち上げて、色々意見をいただく場を作っているところだが、この協議会でもご意見をいただき、今後一つの概念にまとめていけたらと思っている。まだあくまでも速報で集まったものをただ簡単にまとめただけの段階で、ワーキンググループにも示せていないためお配りする資料がなく、パワーポイントの画面だけで見ていただく事をご了承いただきたい。

管理職用アンケートで、「今後学校図書館の機能を強化するために、最も重要なものは何とお考えですか。次の中から、最も近いものを一つだけ選び番号に○を付けてください。」という設問。それから、管理職の方には入っていない設問だが、学校図書館担当者用アンケートの「公共図書館を活用する上での問題点は、どのようなものがありますか。」という設問について、公共と学校図書館の連携に関わる部分のアンケート調査結果として、速報でご報告したいと思い用意をした。

「今後学校図書館の機能を強化するために、最も重要なものは何とお考えですか。」については、実際はこの選択肢はどれも大事な機能である。「読書センターとしての機能」、「学習・情報センターとしての機能」、「教員のサポート機能」、あるいは「子どもたちの居場所」のどれも大事だと思うが、その中で究極の選択をお願いしている。管理職の調査からは、「読書センター機能」と「学習・情報センター機能」が大事だという結果になっている。画面は、「読書センター機能が大事だ」と考える方のパーセントと「学習・情報センター機能が大事だ」と考えておられる方のパーセントをそれぞれ基にして、グラフを作っている。ご覧の通り、小学校では「読書センター」と「学習・情報センター」がそれぞれ同じような割合の回答となっている。中学校の管理職では、「読書センター機能」がより重要であるという傾向がある。続いて、学校図書館担当者の調査から見ると、「学習・情報センター」が大事という回答の割合が多くなっている。ここで一つの特徴が見てとれる。「教員のサポート機能」が大事だという回答が出てくるのが、学校図書館担当者のアンケート回答の特徴と言える。

続いて学校図書館専任職員の調査からは、さらに「学習・情報センター機能」強化が大事だと答える割合が高くなっているが、例えば小学校の方では、「読書センター機能」がまだまだ大事だと考える方が少なからずおられるということがアンケート調査からわかってきた。

続いて公共図書館の司書へのアンケート回答が一番バラエティーに富んでおり、1人の司書が小学校についてはこちら、中学校についてはもう一方が大事じゃないかという回答もある。小学校では既に「読書センター機能」や「学習・情報センター機能」は機能してきているので、今後は「教員へのサポート機能」が重要なんじゃないかという意見や、中学校になると思春期ということから、子どもあるいは生徒の「居場所づくり」機能が大事じゃないかという回答もある。

続いては、事務局サイドで今後求められる学校図書館の機能をまとめてみた図である。ここに学校図書館がある。一つの学校で三つの機能が必要だという視点で書いている。具体的には、「読書センター機能の充実」ということで、読書意欲や読書習慣の向上がさらに必要になってくるだろうと

いうこと。「学習・情報センター機能」については、あえて二つに分けたが、一つは子どもたちの側から見た「学び方を学ぶ場」と、「教員へのサポートの機能」が今後ますます重要になってくるのではないかと考えている。ここでピンクで書いている部分はその為に必要になる仕組みや仕掛けで、それを受けてどのような活動が行われるか、その結果予測される効果が上手に循環をする、一つの機能の中でも循環が起きるというイメージでこの図を描いている。例えば「学び方を学ぶ場」でいい循環が生まれれば、子どもたちはより興味を持って「読書センター」を利用し本を読もうという気持ちになると思う。また、今後おそらく一番大事になってくるかと思われる、先生方を対象にする「教員サポート」は、これまであまり意識されていこなかった部分だが、「教員サポート」がしっかり定着すれば、調べ学習も充実していくだろうし、先生方もどんどん本を使って授業をすることになる。ということで、子ども達の興味関心が生じると、「読書センター」機能もさらに充実してくるだろうとイメージした図である。この三つの視点の中で「学びの循環」が生じてくるのではないかと思う。学校間では資料の相互提供が盛んに行われ、また教育センターにある教員用資料や公共図書館の資料提供が、円滑に循環していく必要があるだろう。さらに、今後考えていかなければならないことがもう一つある。先生方が授業で使った資料の情報や、どんな授業をしたかというような教育活動の情報を、学校間で循環することで学校図書館の使命が達成されていくことになると考えて、「情報の共有化」と書いた。

こういった形を通して、子どもたちの豊かな心や自ら学ぶ姿勢、あるいは授業改善が進んでいくと必要になってくるかと思う。これらについては、あくまで事務局サイドの想定で書いており、動き出してから変化してくるかもしれないが、現時点はこういう状況である。学校図書館と公共図書館が連携する上での課題として、もう一つ学校図書館担当者への調査から見えてきたものは、物流便の改善についてである。現在週一回の物流便だが、その頻度では充分ではないこと。また、今でも先生方はインターネットを通じ公共図書館の資料を見ようと思えば見られるのだが、そういう情報も充分伝わっておらず、公共図書館にどんな資料があるのかよくわからない状態であることも、課題だと考えている。

学校図書館の専任職員への調査からも、物流便が不十分でリクエストした本が遅れてからしか届かないとか、公共図書館からの貸出期間が短いとか、あるいは小学校などの場合、何冊までというような上限があるところが課題にあがっている。

公共図書館の司書からは、やはり物流便の改善についてと、公共図書館の側から見て学校の先生方に公共図書館活用に対する理解が少ないのではないかということ、また公共図書館にも十分な蔵書がないことが学校図書館と公共図書館の連携をさらに進めるうえにあたっての課題ではないか、という回答が来ている。

本日は公共図書館と学校図書館の連携をさらに図るために、ご示唆をいただけたらありがたい。

## ●委員

アンケートについてと、先程の説明に関して意見を申し上げたい。特に管理職用アンケート調査で、学校図書館の機能のうち最も重要なものは何かという質問について、これは答えるときに「読書センター」が重要だとか、「学習・情報センター」が一番だと選ぶようになっている。何を最も重要と考えるか選ぶ、というアンケートの取り方自体にすごく疑問を感じた。島根の取組みを見てもわかるように、どの機能も大事で並行して取組まなければ、あの3つの機能は生きてこない。「読書センター」の機能だけが突出していればいいというものでもないし、また「教員へのサポート」が全くなければ、どちらも活

かされない。だからこのアンケートの取り方自体に問題があって、どういう意図で取られたのか理解できない。「この3つの要素が核として必要なものであるが、現状ではそのうち何が欠けていると思いますか」という質問であるべきだというのが一番の疑問点である。このアンケートをどのように使おうとしているのかも含めて、アンケートを取る側のビジョン、学校図書館についてどのような将来像を描くかというビジョンが明確でないために、このようなアンケートの取り方になるのではないかと心配に思った。ただ先程の説明では、きちんと説明されているので、そのあたり未整理のところがあるのかと思った。

#### ●事務局

先程も申し上げたとおり、一つだけを選ぶことは自分自身もなかなか厳しく、もちろんどれも大事だと思っている。ここであえて一つ選んでもらうようにしたのは、それぞれの機能の中でどのような部分をより一層強化していけばいいか、というキーワードを抽出し、今後活かしていきたいという意図からである。受けた方はそのような意図が分からず、苦しんで答えていただいたかもしれないと思うが、そういった意図を持って行った部分である。

アンケートの中にも説明を簡単に入れたのだが、文部科学省の「子どもの読書サポーターズ会議」の報告「これからの学校図書館の活用の在り方等について」等も参考にしながら、理解していただけない場合を考慮にいれて、アンケートに盛り込んだ。それを見ながら答えていただくようになっている。

#### ●委員

アンケートでは冊数を増やすとかいろいろ改善項目が出てきたそうだが、その中に資料の中身によって貸出期間を延ばすような希望、例えばマンガを10冊借りるのと学術書を5冊借りるのではどちらが利用の時間が必要かという後者の方だと思うが、そういうものはあったか。

個人への一般的な貸出期間について私自身が思ったことだが、豊中は2週間だが3週間の図書館もあるので、資料によって期間を短くしたり長くすることも考えられるのではないかと考えた。

#### ●事務局

そういう希望もあった。

調べ学習をする時に、貸出期間が若干短いということで、いわゆる子どもたちの興味関心を強く惹く本と調べ学習の本とでは貸出期間を変えることができるかという意見があった。このようなことも、今後さらに連携を図る上で検討していく課題になると思う。

#### ●委員

前回、学校図書館と公共図書館の関係について少しお話をした。「子どもの読書サポーターズ会議」報告を取り上げ、その中の特に「教員支援」という提起について、極めて必要ということを前回お話した。学校図書館を「読書センター」として役割設定することについては、比較的誰にも理解されることであるが、従来からも大なり小なりそういう機能は果たしてきている。そこへさらに「学習・教材センター」という役割、授業・学校の教育活動に対してより一層強く関わる役割がもう一つあるということだ。子どもが学校図書館を使うということ自体は、どこにでもある常識的な話だが、さらに学校図書館法では、「児童又は生徒及び教員の利用」と、先生もその学校図書館を使うのだと定義されているものの、教師

が学校図書館を使うということ、まして学校図書館のサービスで教員が援助されるというようなことは、なかなかイメージできる事ではない。それは、おおかたの場合学校図書館がそのような実態になっていないがゆえである。学校教育の中でこれから学校図書館がさらに大事な役割を果たしていく、そのあり方について考える際に、「教員サポート」がとりわけ重要だという提案がされているということ。これは一つの政策的提言なのだということだ。それぞれの機能がパラレルにあってどれが重要・重要でないというような話ではない。

アンケートの結果については、わりあい正直に出ていると思う。校長先生や管理職の教員それから担当教員つまり司書資格を持っているとか図書館主任の先生、それから学校司書と公共図書館の司書、という四つの対象から聞いたもので、「どの機能をより重要と感じているか」というよりもむしろ、「どの機能をイメージしやすいか」ということが示されている。管理職はどちらかといえば「読書センター」というイメージが比較的強いということを示していて、学校司書の場合にはもちろん「読書センター」であることは当たり前とした上で、授業の関わりの部分をより一層やっていかなければならないというのが理念として示されたという結果に見える。大事なところは、先程申しあげたように「情報センター」とか「学習センター」としてあまりイメージできていないという状態を、どのように受け止めるかというところだ。それから「教員援助機能」というのは、それだけが出てくれば変な話でもある。「教員援助機能」というのは、先生にとって役立つようにするという事だが、そこを重視するという事は、一方で子どもたちをそこそこに置いておくのかという事になるが、そういうことではない。あくまでも子どもたちのために学校図書館があるということは当たり前なのだけれども、そのように運営されていく中において、先生に対しても役立つ事をやっていかなければならない。先生がそういう風に受け止めていくと、そういう学校図書館を子ども達とどのように共有しようかという視点が、対子ども、あるいは教育に使うという視点が出てくる。他にも「癒しとしての居場所」という要素もあるが、あまり数字にはあらわれていない。そのような代表的な三つの役割が様々に絡みながら、学校図書館の活性化を追求していくというような問題であり、どれかひとつということじゃない。その点先程からなんとなく違和感があるという意見が出るのはもっともだと思う。どれかひとつが最も重要とか、どれかをまずやるという問題ではないからだ。むしろそれぞれが絡みながらあるものなのだ。とりわけ「教員のサポート」については、かなり意識的に取り組んでいかないと、先生自身も学校図書館から助けをもらうとか学校司書が自分達の助けになるという風には、基本的にはまだまだ思っていないので、どう取り組めばそういう機能があるということを感じてもらえるようにできるか。そして使ってもらって、「そうか、なるほど」と、図書館を使うとこんな事ができるのかと先生が初めて気づいて、それが実践につながっていくというものである。今は、その前の段階である。豊中の場合は、かなり前から学校司書を配置して実態を重ねてきたので、次へ移る段階が来ていると思うけれども、それでもまだまだ図書館は子どものもので、学校図書館に関わるうえで果たすべき先生の役目を、いかに子どもに本を読ませるか叱咤激励をする役割だと思っている先生も少なくない。そんな中で「教員への支援機能」という視点が文部省から示されてきたわけで、今の状況の中でそれをどう受け止めるか、どのへんまで教員の意識の中に共有されているかというのを現在の環境の中で見ていくためのアンケートとすると、これから先に進めていくために今回の調査は使えると思うし、使っていけばよいと思う。ただし、三つの機能の相互関係については、しっかりとらえておかないとまずいと思う。

## ●委員長

今の質問が出る背景を整理したいが、ブックプラネット事業の中で行われるこのアンケートの設問に関しては、どういう部局がどういう仕組みで、どういう風に企画設定したのか。

## ●事務局

ブックプラネット事業は、学校図書館を所管している義務教育課の私と、岡町図書館の副主幹1名がプロジェクトの担当者となって取り組む体制をとっている。この2人と、コンサルティング会社の三者の間で、小学校2校と中学校1校に対し先行調査として聞き取りをした事も受けながら、どんな課題が出てきているかという状況把握をしながら、このアンケートの設計をした。先程も申し上げた通り、さらにどんな要素を強くしていきたいと考えられているかと思い、究極の選択をしていただいた。その選択の理由として、どんなことが挙がっているかが、今後概念設計をしていくうえで大事になってくると思う。

## ●委員長

先程出された疑問を受けて、前回は振り返り論点整理していただいたが、「読書センター」と「学習・情報センター」と「教員支援機能」は、トレードオフの関係であれかこれかを選ぶとか、あれを重視するからこれが落ちてもいいよというような関係ではないと、いずれも連携しながら発揮させるというのが本来であって、どれを重視するべきかという設問自体根拠を失わないか、という根本的なことを言われたと私は思う。

三つの役割については、文部科学省がこういう機能を発揮するようにと、「子どもの読書サポーターズ会議」報告を通じ示しているとする、「読書センター」であるからこそ「学習・情報センター」としての役割が活かされ、「教員支援機能」が発揮できるという関係があるのではないかと、という指摘だった。その相乗効果が出てくると、また教員に対し学習資料作成援助が盛んになるなど、相関関係・相乗関係にあるのであって、するとこの質問を設問する事自体がナンセンスではないかと逆に言われてしまう。そうするとせっかくこれを作られた方が気の毒なので、どういうレベルの責任で作ったのかと逆に聞きたくなったというわけだ。責任追及ではない。意味のあるしかも役に立つアンケートをとろうと思うなら、当事者をもう少しピックアップして、学校図書館の司書現場にいる人にもっと聞いてみたほうがよいのではないかと。公共図書館の司書現場からも入ったわけなので、事のついでに図書館協議会でも一度協議していたら、共同責任を持たせることもできたという意味でもよかったのではないかと、感じた。というのは、豊中市立図書館の自己評価システムを作る時に、この図書館協議会が関わって評価項目もすべて1年以上かけて一緒に作った。このような設問に関しても参画と協働で作るべきじゃないかと、私は問題提起したいと思う。

というのも、このようなアンケートの設問をつくることは、ビジネスライクに出来るようなことではないからだ。アンケートに対する答えを導きだしたいと思って設問するのであって、純粋に科学的に設問するものではないと思う。いわゆる物理学の調査ではないので、むしろ相乗効果を見出すべきではないかと問われた時に、この設問設計ではアンケートの意味そのものが問われてしまう危険があるという指摘がされたと思う。責任を取れと言うわけではないが。

他にご意見はないか。以上で今日の議題については終了したが、全体を通しお気づきの点があって、

まだ発言されていない方がおられたら、お願いしたい。

### ●委員

前回欠席をしており、かなりタイトな資料をいただいた。

すでに他の委員さんから指摘されたので発言を控えていたが、先程の読書活動の評価報告書は、一覧になっているグラフ等、非常にわかりやすいというか、これだけのネットワークがある中心に図書館が位置していて、図書館がどれだけの関係を結ぶために努力してきているかというのがよくわかる図だと思った。

アンケートの件に関しては、私も先程指摘のあったように、管理職の方のグラフを最初に見た時に「えっ」と思ったのが、小学校の方が「読書とセンター」と「学習・情報センター」の要素が拮抗している形になっており、中学校の方は「読書センター」がやや多くて「学習・情報センター」の方が少ない結果だったので、これは逆じゃないかと思い、よくよく設問を見てみると、「今後学校図書館の機能を強化するために」と書いてあったので、好意的に読めば今それほどでもない部分を強化したいという事なので、小学校では「学習・情報センター」が少し多めになっていて、中学校に関しては、これまでどちらもあり力を入れられていなかったで、「読書センター」に関しても多めに挙がっているのかなと思いつながりを見直した。やはり皆さんからもご指摘があったように、「強化」とか「今後」という言葉をきちんと把握した人と、設問の中で何が重要かという部分だけを見た人が混在している可能性は高いと思った。そういう意味では、やはり設問の仕方はもっと丁寧でもよかったのかなと思う。

もう一つは公共図書館よりも学校教育に関わる問題かもしれないが、算数・数学や英語などの科目ごとに、また学年によってどこまでのレベルに到達すべきなのかという事が指導要領などで決まっているが、まだまだ「読書センター機能」や「学習・情報センター機能」について、追求するようなことはまだまだ個人の努力だとか、個別の学校の努力で取り組んでいる部分が多くて、この小学校ならどこまで、この中学校についてはどこまでというような情報の共有がなされていないと思う。そういった面も情報共有をする流れの中で、小学校は小学校で中学校は中学校で集まるとかして、横の情報共有だけではなくもう少し縦の情報共有も必要ではないかというのが感想である。

### ●委員長

それでは以上で図書館協議会の審議を終えるが、今日も二人おられる傍聴の方から本日の協議会をふまえて感想や批判などをいただきたい。

### ●傍聴者

子ども読書推進計画の評価については、私自身もずっと委員として関わらせていただいたが、その活動と評価報告書について評価をいただき、ありがたく感じている。読書の環境を整備するとことを、みんなで力をあわせてやってきて、それを分かりやすくまとめようと努力した。

それからもう一つ申し上げたい。今回ブックプラネット事業でアンケート調査をされた件に関係するが、豊中の司書教諭発令が2003年にありまして、司書の全校配置が2005年に完了した。私達も実はそれまで学校ではその環境を活かしてかなり努力して先生達が授業に活かす努力されてきたと思っていたが、どうもその頃から授業に学校図書館を使うということが少なくなってきた、最近では授業に

活かしている先生を探すのが本当に大変になってきた。その事を危惧して、学校図書館の機能の実態がどうも読書に偏っているという事と、先生方へのアプローチができていないことを危惧して、この夏義務教育課にお願いして、義務教育課にも実態把握をしていただきたいと思います、調査を依頼した。

学校図書館の活用体制について、これがどうなっているか、全校で活用するためには年間計画表が必要だと思うが、その計画表がありますかと尋ねましたら、小学校では「計画表がある」学校は90パーセントで、「ない」方が10パーセント、中学校では「計画表がある」方が17パーセントで、「ない」方が83パーセントと、中学校の方では年間計画すらないということが分かった。それから先生達、教員の取組みはどうなっているのかという事について知りたいと考えた。先生達が使うために、司書教諭がどのくらい機能しているかという事を。そしてさらに、学校図書館は授業だけじゃなくて、全ての教育活動に使われるものなので、授業以外でどんな事に使われているか、という主に四つの事を知りたくて調査をお願いした。

この1学期の間に教員の取組みをどれだけされたかという調査では、小学校は1学期171時間のうち、4回から40回で全校平均14回。中学校は平均が9回です。1学期間で9回という事は、1年間で27回だ。島根のDVDを見ていて、ある中学校では1年間で426回使ったということから見ても、豊中の少なさがわかると思う。それはなぜかという、私達は司書教諭が機能してないからだと考えた。それで司書教諭が他の先生に授業を公開したり、その報告があったかどうかを聞いてみた。小学校では、20パーセントの学校で「ある」と回答があった。中学校ではゼロだった。それから、その他に学校図書館を教育活動の中でどういうところとして使っているかということでは、小学校では読み聞かせ・折り紙・工作・クラスでの展示・掲示・学習発表会など。意外なものとしては、給食の献立を皆さんに知らせるためにというのもあったが、研究授業や教材研究は、数としては少なかった。中学校では、やはり朝の読書・委員会活動・生徒会・レクリエーション指導・平和学習・人権学習など。それらも教材研究のうちかもしれないが、意外に少なく、やはり先生達が使われていない実態が浮きあがった。

何を言いたいかと言うと、先程から話に出ている「教員への支援機能」という場合に、誰が支援するのか、支援する以前の体制を作ることが大切である。私達が、この何年間か司書教諭の研修をしてくださいと言ってもされていないので、司書教諭の先生は発令されてもどう動いていいかわからない。どうしたらいいかわからないということが、ここ何年も言われてきた。ところが最近言われなくなった。大学を出たての若い先生が司書教諭として発令されているけれども、どうしていいかわからない。研修もないから、意欲のある方は先輩に聞いてやってはいるが、実際働けない状態がある。だから先生方も使えない。だから年間計画も作れない。というのが豊中の実態だと思う。かなりはっきり課題は見えてきているのではないかなと思っている。

## ●委員長

大変貴重なご意見をいただいた。学校における司書教諭と学校司書の系統だった位置づけと、それに伴う研修、教員支援に繋がる学校内のシステム化。そういうことがやはり必要かと思う。

図書館協議会としても全く同感であると申し上げたい。私達は図書館長の諮問機関なので、学校教育にまで踏み込んで言わないでほしいと言われたらそれまでではあるが、ただいまのご発言に対しては我々も全く同感であり、その方向に向かって取組みが進むことを我々も期待したい。

それではこれで、本日の図書館協議会を閉会する。